

第2回 滋賀県観光事業審議会 議事概要

1 日 時：平成29年7月31日(月) 10:30~12:00

2 場 所：滋賀県庁本館4階 4-A会議室

3 出席者：(敬称略 50音順)

○委員：石川 亮、石崎 祥之、伊吹 惠鐘、岩田 春美、王 小娟
金子 博美、川戸 良幸、黒田 芳司、菅又 武之、田中 治男、
寺内 貴美子、羽田 真樹子、宮川 富子、吉井 茂人

○オブザーバー：廣岡 秀一、廣脇 正機

<開 会>

江島商工観光労働部長あいさつ

○「滋賀県観光事業審議会」の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

○本日は、大変お忙しい中、会議にご出席いただきお礼申し上げます。

○さて、昨今の本県観光の状況であるが、訪日外国人観光客が増加する中で、昨年度においては、ビワイチやロケ地観光の推進、さらには海外プロモーションなどを行った結果、観光入込客については、平成28年の統計は現在集計中であるが、過去最高を記録した平成27年の4,794万人を大きく上回る見込みとなっている。

○そのような中で、本年度においても、前回、3月の審議会でご議論いただいた「滋賀県『観光交流』振興指針アクションプラン」に基づいて、国の地方創生の施策も活用しながら、国内外に向けて滋賀の魅力を発信し本県への誘客を強力的に推進してまいりたいと考えている。

○具体的な取り組みとしては、体験型観光である「ビワイチ」サイクルツーリズムについては、4月に商工観光労働部内に「ビワイチ推進室」を設置し、土木交通部、県民生活部と兼務もかけながら、全庁で取り組んでいるところである。

○現在、ビワイチ推進総合計画の策定に向けて準備を進めており、様々な方々からのご意見を伺いながら、年度末までの計画策定を目指すとともに、ビワイチ推進に向けて一体的に取り組む体制の構築を進めていくこととしている。

○また、この10月から開催する「日本遺産 滋賀・びわ湖 水の文化ぐるっと博」では、市町や関係団体と連携し、県内で70を超えるまち歩きや体験プログラムを計画しており、これらを組み合わせながら、琵琶湖をはじめとする自然景観、数々の歴史的資産、食・グルメなど本県の多彩で特色ある観光素材の魅力をお伝えできるよう工夫した内容で取り組んでいく。

○この「ぐるっと博」で弾みをつけ、来年度、さらに大きな大型観光キャンペーンを計画しており、県内全市町の観光素材を「歴」「食」「遊」など虹色に例えて7つのカテゴリーに分け、その魅力をつないで県内外の皆様へ発信していきたいと考えている。

○なにより県内各地を訪れる来訪者に対し、それぞれの地域で迎え入れる仕組みづくりが大変重要と考えており、今年度、来年度にかけて実施する観光キャンペーンを通じて、市町や地域の皆さんと観光素材を磨き上げるワークショップなどを実施するとともに、その検証結果を踏まえ、地域での来訪者を案内する体制の整備などに取り組み、その成果を2020年の東京オリンピック・パラリンピック、あるいは2021年のワールドマスターズゲームズ2021関西にも繋げていきたいと考えている。

○本日は、昨年度のアクションプランの成果の評価についてご意見をいただくとともに、来年度に向けた施策構築についても御意見を頂戴したいと考えている。

○最後に、本県の持つ琵琶湖をはじめとした豊かな自然や多くの文化財、地域に根ざした生活文化など、豊富な観光資源の魅力を、委員の皆様方のお知恵も拝借しながら大いに活用し、本県の観光振興施策を推進してまいりたいと考えているので、よろしく願い申し上げます。

議題1 平成28年度滋賀県「観光交流」振興指針アクションプラン対象事業の評価について

事務局より資料1について説明があった。

委員意見、質疑

委員から出された意見および質疑の概要は次のとおりである。

(委員)

○全体の目標数値についてこの5項目で評価しているのはわかるが、それぞれの56事業のこれは◎、これは△というように判断する、一つ一つの事業に対する基準というのがあるのか教えていただきたい。

(事務局)

○基準についてだが、何割達成していたら◎といった明確なものはないが、各所管課で自己評価しており、必ずしも数値が達成していなくても、事業の趣旨が達成されていれば○、大幅に超えていれば◎、達成できていなければ△というように評価をしている。

(委員)

○担当課の体感ということか。

(事務局)

○数値的な評価をしているが、感覚的なものも入っている。

(事務局)

○資料の2ページ以下を見てもらうと56事業が全て表になっているが、中ほどに目標という欄がある。事業着手前に目標を立てて、それに対してどうだったか、という評価をしている。数字があるものについてはこの数字に達したかどうかはまず第一の評価の仕方であるが、これが仮に達しなかった場合にも、内容的には十分目的を達した、あるいは数字は達したけれども、内容が不十分だという余地は残している。

(委員)

○質問が2つあり、まず1点目であるが、目標1の「観光地『滋賀』の認知度向上」の部分で、2つ目の戦略の「ターゲットを意識した継続的な情報発信強化」の「課題」のところに、「各種メディアを活用した情報発信により、滋賀県の観光地としての認知度は一定向上した」とあるが、私は新聞等を見ているが滋賀県のことをあまり見かけないと感じているが、メディアを活用した情報発信というのはどういう手段でしたのか、そして本当に認知度がどれだけ向上したのか、どのくらいのレベルなのかということをお願いしたい。

○もう一点であるが、1か月ほど前に京都新聞に「滋賀県の観光について」という記事が

出ており、それにも外国人観光客、特に宿泊客が激減しているという記事が出ており、それに対して観光交流局のコメントが出ており、大丈夫という安心感を持って答えられていたが、その辺ギャップがあるようで、認識を教えていただきたい。

(事務局)

○1点目のメディアの活用とその成果ということだが、今の欄の左の「対象事業の評価」にあるように、インターネットサイトであるとか、ユーチューブを使うとか、そういうメディアも含めてあげており、例えば昨年度の三成をテーマにしたユーチューブでのCMというのが、いろんな評価はあると思うが、少なくとも多くの方にご覧いただいた、というものも含めてここでは評価をしている。その成果ということであると、地域ブランド調査というものがよく新聞などでも取り上げられるが、これの「認知度」というのを見ると、2015年が44位であったところが、2016年は32位ということで、若干向上しているということを踏まえて、このような評価をしたということである。

○2点目の特に海外からの観光客の減少についてだが、特に昨年の後半くらいから今年度にかけて、県内の宿泊施設の利用というのは少し前年を割っているという状況である。年間トータルで見ると、ここに掲げている数字になっており、前年を上回る数字が出ているが、今後は少し低めの数字が出てくると思っている。これは一つには、全体として、特に東アジア、中国からの団体客が必ずしも好調ではないという動きがある中で、従来、京都、大阪の宿泊が逼迫していた状況が滋賀県への宿泊につながっていたと思うが、京都、大阪で旅館、ホテルの供給が増えたり、特に大阪では民泊の活用が非常に伸びているということもあり、少し需給の逼迫状況が緩和されているということが反映している。今後は流れてくるだけではなく、滋賀そのものに魅力を感じて来ていただける、そういうものを作っていかなければいけないと思っており、そのあたりは、目標2のところで、「滋賀ならではの」を活かした取組にこれから力を入れていかなければいけないという認識をしている。

(委員)

○認知度が32位に上がったというが依然として低位で、何年か前から電通とかに頼んでプロモーションしながら、宣伝効果が出ていないのではないかといつも思っている。それと宿泊者の実績を見ていると東南アジアが圧倒的に多いが、なぜ欧米の人が滋賀県に訪れていただけないのかというのがずっと疑問にあって、今後の施策としてどう対応していくかということと、中国、台湾、香港を中心とした団体のお客さんも、少人数で、自然を楽

しむというようにだんだん嗜好が変わってきており、そうすると滋賀県はそれに当てはまると思っているが、それに対する対応をどのように今後展開していこうとされているのかということを知りたい。長浜は宿泊者数が増えているが、外国人の宿泊者数は減少している。だから、来年度以降の数値目標をどうするか、という悩ましい点がある。

○それと、ビワイチは最近NHKで盛んに取り上げられて、非常にいいと思っている。予算も1億3千7百万円付いているということでもいいのだが、あくまでもビワイチのターゲットというのは日本人ということになると思うが、資料のいろんなところでターゲットを絞り込むと書いているが、このターゲットというのは日本人なのか、外国人なのか、こういった年代層を狙うのかということのを、私たちにわかるように教えていただきたい。

(事務局)

○宿泊も含めて、これまで海外からの誘客については東アジア、東南アジアを中心にプロモーションをやってきた。特に滋賀県は従来から台湾に非常に力を入れてきた経過があり、その結果として、他の都道府県と比べて台湾からの観光客が一番多いという特殊な姿になっているというのが現状である。これはなぜかということ、滋賀県の場合は恐らく、日本に初めて来る観光客が滋賀県を訪問いただく確率というのは低いと思っており、そうすると二度目以降、三度目、四度目のお客様にターゲットを絞り、日本へのリピーターが多い地域はどこだという風に考えると、例えば台湾であるとか、香港というエリアということで、今まで台湾に力を入れてきた。ただ、同時にいつまでも東アジアだけということではなく、また現時点では台湾へのプロモーションというのは県あるいは市が取り組むというよりも、民間の方が一生懸命に取り組んでいただいている状況であるので、私たちとしては、今後は欧米も含めたところへ少しフロンティアを持っていきたいという思いも同時に持っている。

○また、ビワイチであるが、決して国内だけをターゲットにしているというわけではない。ただ、現時点で、例えばビワイチのコースに外国語の表記がちゃんとできているか、ということも含めて考えると、今十分対応できているという状況では全くない。ただ、現に台湾からの観光客がたくさん来て走っておられたり、また米原にサイクルステーションを作ったが、そこでレンタサイクルの担当者と話をしていると、例えば今日はスコットランドの人が来てたよとかいうこともあり、じわじわ広がりを見せているということと、ヨーロッパでも、特にイギリス、ドイツといった方々はサイクリングに非常に興味をお持ちだということもあるので、そのあたりのアプローチを同時にしていきたいと思っている。ただ、

全般を通して、やはりインバウンドということに対して注目が集まっているが、95%のお客様は依然として国内なので、ここを同時にしっかり大事にしていくというのが大切な姿勢ではないかと考えながら、対応を検討したい。

議題2 政策課題協議等に向けた観光施策の構築について

議題3 今後のスケジュールについて

事務局より資料2～資料6について説明があった。

(会長)

○今後の観光施策についての皆さんの知見を集大成していきたいと考えているので、どなたからでも発言をお願いしたい。

(委員)

○意見というよりお願いだが、滋賀県の観光の中心はやはり琵琶湖ということで、それは疑いようがないが、琵琶湖から離れた市町の事業もいろいろやっただいてはいるが、例えば資料4の「これからの滋賀県の観光施策の方向性」の「滋賀の強み」を見ると、甲賀市のものが一つもないということで、琵琶湖から離れた市町の県民からするとちょっと置き去り感が強いという感じがする。もちろん我々の努力が足りない部分はあるが、市民、市議会等からももっと県に言ってこいという話をいただく。もちろん、琵琶湖は大切な資源ではあるが、琵琶湖の源流を守るような業務に従事されて一生懸命やっている県民もおられるので、端っこにでも入れていただければと思っている。市町が合併して、琵琶湖に面していない市町が減少する中で、そういった声が県の中では小さくなっているのかなあという気がする。

○それと、特に日本遺産であるが、水の文化ということで、多くの市町が関わって、事業主体が県であるということであるが、甲賀市もこの4月に甲賀忍者と信楽焼という二つの日本遺産の認定をいただき、それぞれ他の府県の市町と組織した協議会で事業を展開しているが、本市単独でもW遺産ということで、それに関わる事業をやろうとしているので、滋賀県においても「水の文化」と同様とは言わないが、端っこにでも加わらせていただきたいと思っている。

(事務局)

○決して、琵琶湖に面していないと扱わないということはないし、そういう意味では「琵琶

湖と水」と言っているのは、まさに山に降った水が琵琶湖にたどり着く、その間の全てをご覧いただくようにしたいという意識をもったものである。同時に、そうは言いながら、あれもこれも皆同じように力を注いだのでは意味がない。そこは、他にないものである琵琶湖、そしてそこに結びつく水をキーワードにした人々の暮らしぶりであるとか、こういった特徴的なものが各地域にあるので、当然そこには甲賀市のエリアのものも含めて考えているが、そういうパッケージで考えていきたいということを表現していると理解いただけるとありがたい。

(委員)

○今年10月から日本遺産のキャンペーンが始まるということで、来年の大型観光キャンペーンに繋げていくことを県としては考えておられるが、旅行会社の人間としてはこのスケジュールが気になるところで、今年日本遺産のキャンペーンは10月から3月ということで各大手旅行会社のパンフレットに間に合い、10月から下期のパンフレットにさまざまにPRする展開を各旅行会社が図っているかと思うが、来年度の大型観光キャンペーンは確か夏からと聞いているので、そうすると上期のパンフレットに掲載しなくてはなくなる。今後の展開としては、旅行会社に情報が下りるタイミングであるとか、キャンペーンのプロモーションが10月を目途に5連ポスター掲出とか書いているが、具体的に中身がどうなるかというのは気になるところなので、ぜひまた情報を発信していただければと思うので、よろしく願いしたい。

(会長)

○今後、広げていくという意味では、タイミングというのは非常に大切になるので、よろしく願いしたい。

(委員)

○私は観光事業者であるが、観光事業者自体の能力というか、力量が非常に低い、生産性が低いということを感じている。そういう意味で観光産業としての滋賀県の持ち味を作っていくために観光事業者をいかに育成していったらいいかという課題がある。観光というのは外向きばかりの話になりがちだが、外から人を呼んでくる仕事と、少しでもお金を落としてもらおう仕事乖離している感じがする。他の事業であれば工業界とか医療業界とか言うが、観光業界という名前はあるが、実際には名ばかりというか、個人経営の集まりで、それぞれの力が結集されていない。

○やはりモノの発信があまりにも多すぎる。モノというのはインターネットの時代なら来なくても買えたり、他の所でも味わえるという、非常に不安定なマーケットになるので、これからはコトということでよく言われるように、現地に行かないと味わえないもの、コトという一つのストーリーもあるし、モノがいろいろ集まった時間的な軸での商品の説明とかもあるが、そういったことをやっていく施策をとっていかれた方がいいのではないかと。

○それと資料4の「これからの滋賀県の観光施策の方向性」ということで、自然と歴史と文化と食、あるいは七色ということ、私もビジターズビューローには関わっているが、最近のメジャーな観光施策では、自然と気候と文化と食という、どちらかというと世間一般の、世界に共通する観光の切り口のカテゴリーが一方であるのに、滋賀県はそれ以上の豊富なものがあるから独自の名前を付けて、分野を自分の所の整理しやすい分類にして、世間一般の常識と異なることで滋賀県の強みを強調しようとしているが、それは長い意味では非常に有意義なことだが、まずは世間一般の時流に乗った中で、滋賀県もそれをまず達成した上で、さらにもっといいものがあるというやり方を考えてもいい時期にあるのではないかと思う。そういうことで、この4つのカテゴリーだが、今一般的に言われるカテゴリーを少し検討することもいいのかと思う。その上で独自性があるので、最初から独自性を強調しすぎると世間一般の方にすぐに理解いただけないということが、今はインターネットなどの情報が豊富な中であるのではないかと思う。

(委員)

○やはり教育機関としてはこの滋賀という場所で何を学び、どんな次世代というものが開けているのか、そういった大きな目標というか、例えば今、20代の学生は確実に次の時代に対する不安感を持ちながら学んでいる。滋賀というのはそういった意味でもここで観光施策のテーマになっている琵琶湖と水に触れ合う旅であったり、自然とか、よく言われる持続可能社会、サステナビリティの観点から日本遺産・びわ湖にビューローがサーベイするようなことをやっている。だから、これからの世代がこの滋賀県でどのように暮らしていけるのか、そしてその暮らしそのものが一つの魅力となっているといった観点で、もう少し私は絞っていく必要があるのではないかと考えている。

○2015年のパリ協定でSDGsという言葉が発表された。我々は2015年を経て大きく時代は変わってきていると捉えている。教育の中でもこういったSDGsの概念を学生に紹介するなどしながら、これからの社会はどんな方向に向かっているのか、というグローバルな考え方をしっかり考える必要があると考えている。それとローカル、我々滋賀

とどう結びつくのかというのが問題になってくるが、それを結び付けるのが、我々の学びであったり、暮らしであったり、もしかしたら観光に結びついてくるのかと思う。そう考えると、日本遺産というテーマ、これは暮らしの水遺産という、非常にいいテーマが上がってきた。そして次にこれから、大型観光キャンペーンに向かっていくが、何となく、次代の我々がどんな暮らしをしていくべきかということも含めたコンセプトに仕上げていくことが大事ではないかと考えている。

(委員)

○滋賀県の観光はパリや京都の観光とは違った観光なのかなというのはもちろん皆さんは意識されていると思うが、そうすると受入れのキャパであるとか、あとは何をもらうかということの環境を整え、来てくださった方がどのような状態で、どういう体験をしていただくかという環境をしっかりと作っておかないと、むやみやたらに来られることによって、いろいろな滋賀県が守るべき姿というのが崩されていく恐れがある。

○例えば、山とか棚田とか琵琶湖とか、どういう状態を見ていただきたいのかということと、そのためにはどういう政策をして、それを守るために今のうちにやっておかなければいけないことをまず考えて、そこで観光で来られた方にはこういうルールを守ってこうしてください、そしてここからすばらしいものを体験してくださいというのを整えながら、情報発信なりルートの整備なりをしていかないといけないかなと思うので、情報発信と同時に一番大事なことはそこになるのではないかなと思う。

(会長)

○攻めと守りの両面という観点で意見が出たが、他に何か。

(委員)

○私は三重県の県境の山の中に住んでいるが、正直ビワイチの話は他人事みたいな、琵琶湖岸の話という感じで見ていたが、先日、私の所に、自転車の休憩ポイントとして載せていいですか、という方が来てくださって、こんな山の中にもルートがある、自転車業界は活発なんだなと実感した。愛知川の上流に住んでいるが、やはり上流に住んでる者として、川を汚したらいけないという意識はある地域なので、琵琶湖だけでなく、水を、川全体を絡めると、川の上流に住む者もいろいろなことに絡んでいけるのではないかなと思う。

(会長)

○少し水から離れた所をどうやって結んでいくか、地域の連携といったお話をいただいた。

(委員)

○ここに掲げられている目標3「来訪者、居住者双方がともに満足できる『観光交流』推進の体制づくり」という目標に関して、彦根、近江八幡、長浜などは観光地として入ることができるが、五個荘の町並みは住民の生活の場へ観光客が入り込んでいくことになる。金堂の町の住民はとても協力的で、ガイドが挨拶をすると笑顔でこんにちは、と返事が返ってくる。観光客の方には、皆さんお知り合いですか、と聞かれるが、皆さん通りすがりの方ばかりである。地域の方とのコミュニケーションがうまく取れ、ガイドとして日々ありがたいと思っている。

○7月28日に醒ヶ井の梅花藻ツアーに参加した。地元のボランティアガイドの方の案内で地蔵川のほとりを散策したが、私が訪れた数十年前にはもっとたくさんの梅花藻が咲き乱れているように思うが、ずいぶん少なくなっていた。ガイドの説明では観光客が住民の家の前に渡してある石の橋に寝そべって、腹ばいになって梅花藻の写真撮影をするそうである。だから、普段生活する住民の方は、自分の家の梅花藻は刈ってしまうという話を聞いた。公共の建物の前の川には梅花藻が今も咲き乱れているが、地蔵川では2か所だけしか見られなかった。帰り際に水撒きをしている住民にこんにちはと声をかけたが、金堂の町の人たちのような笑顔は全然なかった。住民の方との温度差をしみじみ感じたところである。だから、公共の建物の前ではいいが、住民の方の家の前では撮影禁止とかにしないと、住民の方は迷惑しているように感じた。

(会長)

○観光と地域住民のバランスという点でご意見をいただいた。

(委員)

○滋賀県の観光に関しては、先ほどの資料で、外国人観光入込客数45万人の目標に対して55万人を達成し、大きく上回ったという話だが、実際に窓口である関西国際空港にいる私たちの体感としては微々たる増加しかしていない。滋賀県に対する質問も増えてはいるが、他の地域に比べるとまだまだ少ない。だから、知名度向上がまず第一だと思う。他の府県市もすごく力を入れている。思い切ってやっているところもある。例えば、鳥取県はバスで鳥取県まで片道で通常なら3,000円くらいかかるところ、外国人観光客限定で

1,000円にしている。あまり宣伝はしていないものの、口コミの力がすごい。お客さんにどうして知ってましたか？と聞くと、ネット、口コミ。効果がすぐ表れている。予算の問題もあるし、何年も1,000円というわけにもいかないが、まずは手っ取り早い方法としてはこういうやり方もある。

○和歌山県の場合はプロモーター、外国の旅行業者を設置して発信している。通訳では一連の制作には携わっていないので、十分な説明ができない。Wi-Fiも大事だが、店員さんとコミュニケーションが取れないなどコミュニケーションの問題はいろんなところで生じており、案内所に来たらコミュニケーションが取れるので、すごく感謝される。その代わり、いろんなことを聞かれる。だから、一人一人の対応の時間が長くなる。やはり、いいものがあるので、これから滋賀県はもっと外国人の目線で、外国人の言葉で発信した方が認知度が上がるのではないか。

(委員)

○まず一つは観光産業に関してだが、どこの県でもいろいろ考えているし、今日出たご意見はどこの県でも聞かれるが、まずは今まで準備してきたことをしっかりやりきることが私自身は大事ではないかと思っている。観光業界の環境が本当にこの数年で激変しているので、それに追いついていくのが精いっぱいというのが現状かと思うし、滋賀県も統計上、訪日外国人も増えているということで、その時流に乗った形でキャンペーン等を実行していくということが大事ではないかと思っている。その中で、観光の先にある何かということで、例えば大阪府は「水と光」に焦点を当てて町づくりをしていこうとしている。京都も「お茶、海、森の京都」をテーマにこの2、3年続けている。滋賀県も例えば水と緑であるとか、水と生活とか、そういった政策課題、観光施策という点で捉えてみると、観光の先にある滋賀県全体の県土づくり、そういうものが目指すべき姿になっていくのではないかと思う。そのためのヒントを私自身が持っているわけではないが、ポツポツとはできてきているのではないかと思う。

○それから、PR自体はパブリシティとか目に映るものというのは国内宿泊者、国内旅行者向けになるのだと思う。海外から来られる方に対してはやはりインターネットであるとか、口コミであるとか、そういった宣伝手法を伸ばしていくべきだろうと思う。先ほどの梅花藻の話は印象的に思ったが、地域住民の生活を揺るがすのはよくないので、生活を見ていただくような形にするのがいいではないかと思う。実は隣の福井県も観光にあまり力が入っていないくて、それはなぜかと言うと、生活が豊かだからこそ、観光に力を入れなく

ても別にいいのではないかという感じになっているそうである。そういうことも踏まえると、一概に観光ばかり推し進めるのではなく、生活とのバランスが大事だと思う。

(委員)

○データを見ても彦根には観光の目玉が彦根城しかない。目玉の彦根城があるからこそ、他の所に目が行かない、開発できないということがある。私も彦根商工会議所の中に町屋委員会というのを立ち上げて、彦根も彦根城だけでは世界遺産登録がなかなかできないということで、城下町という形態が残っているのも全国でも彦根城だけというのも滋賀大学に来ていただいた先生に言っていただいたので、町屋を残そうという取組を進めているが、空き家が多くて、放っておくとすぐに駐車場になってしまう。町屋を残すだけでなく、町屋をどう活用するか、これも少し彦根の町として残していけばもう少し観光のスポットも増えてくるのではないかと思っている。

○彦根の問題はたくさんあるが、お陰様で今はNHKの大河ドラマで取り上げられて観光客は増えている。日曜・祝日になると駐車場が足りない、高速道路は時間がかかる、そういう状況で今はお客さんもたくさん増えている。でも大河ドラマが終わったらまた少しマイナスのところがたくさん出てくるのではないか。そうなる前に何かしないといけないというのがあるが、滋賀県の観光の状況を見させていただいて、減少しているという部分もあり、なぜ減少したのか、その原因をいろいろ説明いただいたが、的を射た反省になっていないのではないかな、というのは少し気になった。反省するところはしっかりと反省して、新たな取り組みであったりとか、継続した挑戦であったりをしていかないとプラスにはなっていないのではないかと感じた。

○「ターゲットを意識した継続的な情報発信強化」という戦略があるが、どういう人をターゲットにするのか、これから若い人も減っていくし、どうやって若い人を呼び込んでいくか。彦根も大学がたくさんあるが、留まってくれない。留まってもらうためにどういう魅力ある町づくりをするかというのをもっと真剣に考えていかないと、なかなか難しい問題がたくさんあるように思う。これからの施策の中に、情報化社会において、いかに滋賀県が皆さんの興味をもっていただけるような県になるかに、もちろん琵琶湖だけでもダメだし、琵琶湖に関連する周りのものも含めて、もっと考えていかないといけないことがたくさんあるのではないかと思っている。

(委員)

○異なった観点かもしれないが、超高齢化社会で人生をどうするのか、80年、90年と健康寿命が伸びる中で、これから社会をどう作っていくのかというたいへんな課題の中で、琵琶湖の水遺産、水というのはまさに命の根源であり、かつて、最近あまり使われないマザーレイク、母なる琵琶湖という言葉には、非常に深い意味があったと思う。特に滋賀のこれまで培ってきた文化、生活、そうしたものが含まれており、そして今回のキャンペーンでは、祈りと生活がテーマということで、まさに滋賀というのを表しているような気がする。

○そうすると京都、大阪のきらびやかな観光ではなくて、地に足の着いた観光というか、そこに来ていただき、体験していただき、そこで何かを感じていただくという視点があってもいいのかなと思う。そこで暮らしそのものを体験していただく。いずれそこから、よく話題になる移住というのに繋がっていくと思う。今回のデータで滋賀への来訪者を見ると50代以上、特に60歳～80歳で36%ある。この人たちは比較的金や自由があり、知的な興味がある。一方で、そこで自分を確かめたいという気持ちで多く訪れているのかなと思う。そうすると東京、大阪とか神戸と違う何かを求めて来られている。二人で来られている方、家族で来られている方が多いが、恐らく夫婦で来られている。別に滋賀県が背伸びしなくてもそのままを見ていただく、それが滋賀ならではの、またターゲットを絞ったものになるという考え方もある。もちろん20歳～30歳もターゲットではあるが、そういうことも考えられるかなと思いながら、日本遺産の「暮らし」というのが差別化の大きなポイントかと思う。

(会長)

○最後にオブザーバーの方にもご意見をいただきたい。

(オブザーバー)

○今、私が担当している国の取組を紹介させていただきたい。平成28年3月31日に明日の日本を支える観光ビジョン構想会議で、「明日の日本を支える観光ビジョン」が策定され、訪日外国人の旅行者数を2020年までに4,000万人、2030年までに6,000万人とするなど、新たな政府目標が設定された。「明日の日本を支える観光ビジョン」に掲載の各地域での具体的な取組の推進のため、今まで近畿運輸局と近畿地方整備局をメインとした「訪日外国人旅行者の受入れに向けた関西ブロック会議」という会議があったが、国土交通省だけではなく、経産省等の関係省庁、多数の官民の関係者

の方との連携・調整が不可欠ということで、5月10日に「観光ビジョン推進関西ブロック戦略会議」を立ち上げた。この会議には滋賀県からも参画いただいている。この戦略会議の下には課題別に5つのワーキングを設置し、地域ごとに異なる課題の解決および地域の特色を活かした観光振興のための環境を整備していくという目標達成のために、現状把握、課題整理を行い、解決に向けて取組を行っている。そういうところから、何かお手伝いできることがあれば、行っていきたいと思っているので、よろしく願いたい。

○余談だが、私は三重県の伊賀上野という所の出身で、三重県もどうしても伊勢志摩という海の方がメインになっていて、伊賀上野は日の目を見ないという。「忍びの国」という映画があって、少し日の目を見たかなと思っているが、少し悔しい思いをしている。甲賀市とは隣町で、忍者のつながりもあるので、個人的にはそういうところからもお手伝いさせていただきたいと思っている。

(オブザーバー)

○びわこビズターズビューローは県の委託を受けて、県の観光施策の実務部隊としていろいろと事業を行っている。会員として観光事業者が500社いるので、観光事業者の意見を聞きながら、できるだけ現場の意見を大事にしながら事業を執行したいと思っている。先ほどの意見の中にもあったが、今年は特に「水の文化ぐるっと博」ということで、決めたことをまずはやり切るのが大事という話が先ほどあったが、会員の皆様も協力的であるので、何とかそれを実行部隊としてはがんばってまいりたい。

○これも先ほどご意見があったが、滋賀県の観光というのは、ビューローとしても、IRとかテーマパークとかそういう類のものではなく、やはり滋賀県の歴史文化、そして人々の暮らし、祈りといったものを見ていただく、それを県の方でも「訪れてよし、迎えてよし、地域よしの観光・三方よし」という概念に結び付けていただいていると思っている。我々もそういうつもりで、DMOとしてまちづくりというものをがんばってやっていこう、ということで取り組んでおり、少し時間はかかるかもしれないが、そういう地域づくりというのを、PRももちろん必要で、なかなか十分できていないというところはあるが、まちづくりを並行してやっていくというつもりで、がんばっていききたいと思っている。

○また、県の方でも先ほど話があったように、今後の観光の方向性ということについて議論を始められるということなので、我々も合わせて5年間の中期計画の見直しを、ご相談しながらやらせていただきたいと思います。今日のご意見についても参考にさせていただきますながら、がんばってまいりたい。

(会長)

○本日は皆さんから本当に多岐にわたる意見をいただいた。本日は幸い池永副知事にも出席いただき、聞いていただいたので、県におかれては本日の議論を踏まえて、来年度以降に向けた効果的な事業の展開について、よろしく願いしたい。

議題3 その他

(事務局)

○現在の「観光交流振興指針」の計画期間が平成30年度までとなっており、平成31年度からの新しい指針を策定する必要がある。平成30年度に本格的に策定するが、今年度から計画策定の準備に入りたいと考えている。秋から年末にかけて資料の整理や個々の委員の方々相談をさせていただきながら、年内を目途に審議会を開催させていただき、新指針策定の諮問をさせていただきたいと考えているので、よろしくご協力をお願いします。

池永副知事あいさつ

○本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございました。たいへん中身の濃い議論をしていただいた。多方面から多様な意見をいただいたが、私なりに感じたことを申し上げます。

○1つ目に、皆さん、何をどう見せるか、というところで、口々に暮らしとか、自然との共生、持続可能な、といったところを見せていくというご意見が多かったと思う。そこで山や水を大切にということで、必ずしも琵琶湖だけでなく、源流、森林を含めた暮らし、ないしは歴史や伝統を大切にしたらいいのではないかという意見をいただいた。

○2点目に、そのためには単に観光客を呼ぶだけではなく、受入れということで、それは現地の方とのコミュニケーションであるとかガイドとか、それは国内外を問わず地域住民の方との共生というか、暮らしを脅かさないという点が大切であると感じた。

○3つ目に、それが可能になる企画なり、人材育成が欠かせないと思った。観光というのはこれから人口が減少する中、国の内外から人が来ることによって確実に滋賀県に豊かさをもたらすと確信している。そしてまた、まちづくりということにも繋がっていく。魅力を再認識して、そこで滋賀県の人々にとってまちづくりに役立っていくと確信している。そういった意味で、観光というのは大変大事な分野なので、引き続き委員の皆様のお力をいただきながら、滋賀県の観光の更なる推進に尽力してまいりたい。

○本日は本当にありがとうございました。

<閉 会>